

四種の文字が刻まれた元代の銅錘について

吉池孝一



元代の銅製の錘（おもり）を紹介する。これは現在、古代文字資料館（愛知県立大学 E511 研究室内）で管理している。形は扁平の六面体で上部に方形の取っ手（鈕）がある。元代の竿秤（さおばかり）用の銅錘で、六つの面のそれぞれに漢字・パспа文字・モンゴル文字（ウイグル式）・アラビア文字が刻まれている。丘光明 1996（『中国古代度量衡』北京：商務印書館、1996年。169頁）によると、元代の銅錘の中国での出土は比較的多く、各地の博物館に所蔵されているものを総計すると300余りにのぼり、そのうち、年号のあるものは247という。今回紹介する銅錘も年号がある。また劉東瑞 1979（次節参照）によると、銅錘は数多く発見されているものの、多種類の文字が刻された銅錘は稀であるという。当館の銅錘は、摩滅が相当に進んでいるため、文字の識別は容易ではないけれども、六つの面に四種の文字が刻まれていることは見て取ることができる。記されている内容ということになると、直接にそれと確認できる部分

と、他の資料を参考にしなければ分からない部分とがある。そこで、まずはこれまでに紹介された同種の銅錘のうち、文字が鮮明なものによってその内容を確認し、しかる後に本館が管理する銅錘を検討する。

二

これまでに、この種の銅錘につき、その写真および拓本が掲載された文献には次のものがある。

- a. 羅常培・蔡美彪 1959『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』（北京：科学出版社、1959年。30頁）。陸和九所蔵になるもので至治元年の銘のある拓本一種。所蔵者が明記されない大徳四年の銘のある拓本一種。合計二種がある。後者は漢字とパспа文字のみの拓本となっている。拓本は鮮明。
- b. 内モン自治区文物工作隊 1963『内モン出土文物選集』（北京：文物出版社、1963年刊、117頁）。内モンは烏蘭察布盟の興和県魏家村において1957年に発見されたもの。元貞元年の銘がある。写真、拓本ともに鮮明。
- c. 劉東瑞 1979「鑄有四種不同文字的元代二斤銅秤錘」（『歴史教学』1979年第6期、62-63頁）。中国歴史博物館所蔵、大徳八年の銘のあるもの。出土地は示されていない。写真、拓本とも、やや鮮明さに欠ける。
- d. 国家計量総局 1981『中国古代度量衡図集』（北京：文物出版社、1981年。156

頁)。上記の b と c で紹介された二つの銅錘を、新たな写真と拓本によって紹介する。拓本は鮮明。

- e. 丘光明・邱隆・楊平 2001『中国科学技術史：度量衡巻』（北京：科学出版社、2001年第一版。今は2003年第二次印刷本による。400頁）。上記dと同一写真と拓本を掲載する。拓本はdに比べやや鮮明さに欠ける。

以上により、銅錘の全体を知ることのできるものはaに掲載された至治元年（1321年）のもの一つ、b c d eに掲載された元貞元年（1295年）および大徳八年（1304年）のもの二つ、合計三つ。銅錘の一部を知ることのできるものはaに掲載された大徳四年（1300年）のもの一つとなる。

三

上記の銅錘四つの写真および拓本を互いに参照する必要があるけれども、先ずは、国家計量総局1981により、元貞元年の拓本を示すと次のようである。



1 2 3 4 5 6

拓本は六面体を展開したものであり、年号のある面を正面と見なし左から1、2、3とする。対応する他の面を背面と見なし4、5、6とする。正面2の右側に「元貞元年」、左側に「大都路造」とある。背面5は右側に「三十五斤秤」とあり、左側にパスパ文字で「gin pon čuè」とある。これは漢語の「斤半錘」を音写したものであり、内蒙古自治区文物工作隊1963(p.9)において既にこの読みは示されている。なお、パスパ文字で記された漢語「半」の音節初頭子音であるが、無声無気音の**č**とあるべきところ、有声音の**p**を用いて pon としている（「無声無気音の b」「有声音の p」という表現は一見誤記のようにみえるがそうではない。元代の人たちは、隋唐の漢語音で無声無気音であった漢字には有声音のパスパ文字を対応させ、同じく隋唐の漢語音で有声音であった漢字には無声無気音のパスパ文字を対応させた）。これが、誤刻であるのか或いは拓本の不備であるのかは実物に拠らなければ分からない。背面5の漢語の意味するところであるが、丘光明・邱隆・楊平2001(pp.399-401)によると、「～斤秤」は使用する竿秤の最大計測重量を示し、「～錘」の方は錘の重量を示すというから、「三十五斤秤/斤半錘」は三十五斤秤（最大計測量三十五斤の竿秤）用の一斤半の錘ということ

になる。さて次は、1と6のモンゴル文字（ウイグル式）、3と4のアラビア文字である。劉東瑞 1979によると、モンゴル文字（ウイグル式）の部分にはモンゴル語で「三十五斤秤」とあり、アラビア文字の部分には「ペルシア語」で「斤半錘」とあるという。漢語訳はあるけれども、どのようなモンゴル語とペルシア語に相当するのかということについては述べるところがない。また寡聞にして、これについて他の文献で言及されていることを知らない。そこで、モンゴル語の部分については考えがないわけでもないので、私案を提出し専門家の教を請いたくおもう。

モンゴル語は6と1。6には「učin tabun」（三十五）とあり、一見してモンゴル語であることがわかる。問題は1であろう。これを「badman deng」と読む。（補注）

四

さて、宋元代の民間類書である『事林広記』の中に「蒙古訳語」（版によっては至元訳語とする）が収められている。見出しに漢語語彙を挙げその下に漢字音写のモンゴル語を示す。いま、元代の至順年間（1330-1333）建安椿荘書院刻本により、道具を表わす語彙を集めた「器用門」という部分をみると、「斤秤 登及宿」と「等子 膝褐児」（「褐」は字が不鮮明。『蒙古訳語 女真訳語 彙編』天津古籍出版社、1990年、賈敬顔・朱風合輯により「褐」としておく）の二つがある。「斤秤」と「等子」（等子は戥子に当たる）にどのような相違があるのか分からないけれども、これらはモンゴル文語の dengse（意味は小秤）や漢語の戥子 dengzi（意味は小秤）の音形と関係のある語であろう（注1）。

ところが明代のモンゴル語資料になると、どうしたわけであろうか deng 系統の語はみられず、badman となる。『華夷訳語（甲種本）』「器用門」によると「秤 巴惕蛮」（惕に d をあてるのは一見不具合のように見えるがそうではない。音節末の有声破裂音は無声有気の漢字で表記するようになってきている。無声有気の音節初頭子音をもつ「惕」を使用するのはその例である）とある。『韃靼訳語』「器用門」には「秤 把蛮」（音節末の子音「惕」を表記しないのは単純な齟齬ではない。音節末子音は表記しないという古い表記法があり、それを受け継いだためである）とある。『盧龍塞略』「器皿類第八」にも「秤曰巴鴨蛮」（「鴨」は「惕」の誤刻であろう）とある。なお、モンゴル文語や現代モンゴル語諸方言に Badman に相当する語は見当たらない。

以上モンゴル語の資料によるかぎり、銅錘に記された「badman deng」は、秤（はかり）という意味を持つ二つの語を併記したもののように見える。しかしそうではないであろう。

五

明代のいわゆる華夷訳語乙種資料にウイグル語の『高昌館訳書』および『高昌館雜字』がある。これは、ウイグル文字ウイグル語と漢字漢語と漢字音写ウイグル語の三種によって編んだ語彙集である。その中の道具を表わす語彙を集めた「器用門」に「batman 秤 把蛮」とある。さらに、数字や度量衡単位を表わす語彙を集めた「数目門」にも「batman 斤 把蛮」とある。これより、明代のウイグル語では batman を道具の「秤」としても、重量単位の「斤」としても用いていたことがわかる。同じく明代の華夷訳語丙種資料であるウイグル語『畏兀児館訳語』の「数目門」には漢語と漢字音写ウイグル語で「一斤 必児把惕慢」（これは bir batman を音写したもの）とある（注

2)。こちらには重量単位の用法しかみられない。現代ウイグル語に目を転ずると patman がある。これも重量単位である。また、11 世紀後半のアラビア文字チュルク語資料『チュルク語辞典』（マムド・アル・カシガリ編纂。今は漢訳本『突厥語大詞典 第一巻』北京：民族出版社、2002 年 469 頁による）には「bir patman ət」（1パトマンの肉。今は漢訳本のローマ字転写にそのままよった）のように重量単位として使用されている。

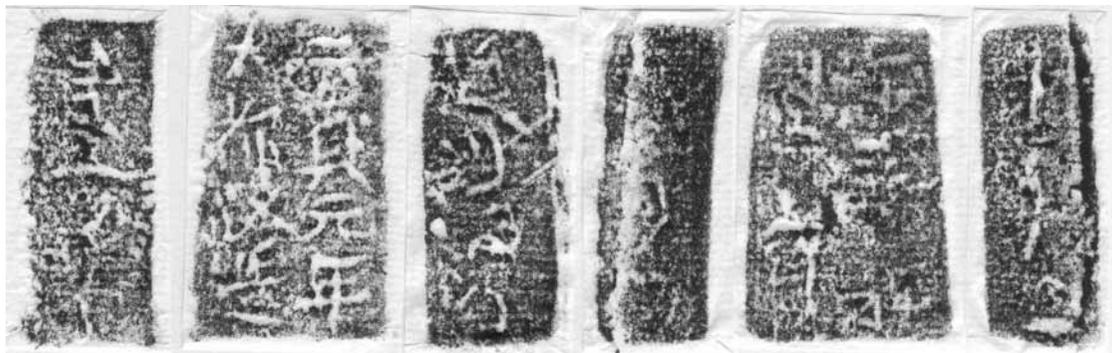
おそらく、batman は重量単位を表わすウイグル語として使用されており、それが秤（はかり）をも表わすようになった。そしてある時期、badman としてモンゴル語に借用された。その結果、元代の銅錘には重量単位を表すモンゴル語として記され、明代の華夷訳語甲種本には秤を表すモンゴル語として登録されることとなった。その後、なぜかこの語はモンゴル語の中から駆逐されてしまった。

以上により、銅錘のモンゴル語部分は「 učin（三十） tabun（五） badman（斤） deng（秤）」であり、漢語「三十五斤秤」と逐一对応していることがわかる。数字がモンゴル語、重量単位がウイグル語、秤（はかり）を表わす語が漢語ということになる。たまたま複数の借用語を使用せざるを得なかったのか、それとも意図的に主要三民族の語をモンゴル文字で記したものが定かではないけれども、国際色豊かな文物となっておりなんとも興味深い。

なお「ペルシア語」とされる部分については、漢語「斤半錘」すなわち「一斤半の錘」に当たる語が綴られているとの予想のもと、他の幾つかの拓本と比較しつついろいろと考えてみたけれども残念ながらこれと言った読みには至らなかった。この部分については今後の課題であるが、まずは專家の教えを請いたくおもう。

六

とりあえずこれで、「ペルシア語」とされる部分を除き、三種の文字による各語の音形と意味があきらかとなった。次に本館が管理する銅錘との比較に移る。



1

2

3

4

5

6

拓本は六面体を展開したものであり、年号のある面を正面と見なし左から 1、2、3 とし、対応する他の面を背面と見なし 4、5、6 とする。正面 2 の右側に「元貞元年」、左側に「大都路造」とある。背面 5 は右側に「二十五？秤」とある。「斤秤」とあるはずであるが「斤」字は確認できない。「秤」については拓本では明瞭でないが、肉眼によると「秤」の字であることがわかる。左側の最上部にはパスパ文字の Wy と di が縦に並んでいる。これは漢語の数字「一」を音写した「yi」である。ここには漢語

「一斤錘」を音写した「yi gin čuě」が刻されていたはずであるが、「gin」と「čuě」については字形の一部しか確認できない。この銅錘は重量一斤の錘ということになる。実測重量は515gであった。丘光明・邱隆・楊平 2001(401頁)によると、当該書で紹介された8件の銅錘につき一斤の重さを算出すると、最小が585g、最大が638g、8件の平均値は608gであるという。本館で管理する銅錘は一斤515gであるから、これまでに発見されたものに比べるとかなり軽いことがわかる。モンゴル語部分は1と6である。1の「badman deng」(斤秤)はかろうじて確認することができる。6のほうは「qorin tabun」(二十五)とあるはずだが確認は難しい。3と4は所謂「ペルシア語」の部分である。その読みについては今後の課題ということとせざるをえない。

注

1) 「滕褐児」の「滕」は、漢語の中古音では有声破裂音であるが、元代北方にあっては無声有気の破裂音となっていたはずであるから、あるいは後者はモンゴル文語の tengceger(釣り合い、平衡器)などに関係のある語であるかもしれない。いずれにしても漢語の中古音で有声であった漢字を用いてモンゴル語音を音写する場合、間々不規則な対応が認められ、これは別に検討する必要がある。

2) 庄垣内正弘 1984「『畏兀児館訳語』の研究 明代ウイグル口語の再構」(『外国学研究所 内陸アジア言語の研究』神戸市外国語大学外国学研究所、昭和59年発行。50-172頁)の157頁参照。

補注:その後、松井 太 2002「モンゴル時代ウイグルistanの税役制度と徴税システム」(『碑刻等史料の総合的分析によるモンゴル帝国・元朝の政治・経済システムの基礎的研究』平成12~13年度科学研究費補助金・基盤研究(B)(1)研究成果報告書。87-127頁)において、以下のように、元代銅錘のモンゴル語部分を badman deng と読み、漢語の「斤秤」に当てている記述のあることを知った。[2005.4.22 補]

D3.batman:>mo.badman.頻出する重量単位。この uig.batman=chin.斤の対応は、明代の『華夷譯語』からつとに推測されていた[山田 , pp.195-196; Yamada , p.498]。さらに、元代銅權に記されたウイグル字モンゴル語・アラビア字ペルシア語・パクパ字漢語・漢字漢文の四体合璧銘文にも chin.斤秤/mo.badman deng「斤の秤」という対訳例がみえる。従って、モンゴル時代の uig.batman(~ mo.badman) =chin.斤の対応もほぼ確証されたといえ、batmanは「斤」と訳すことができる。(111-112頁)